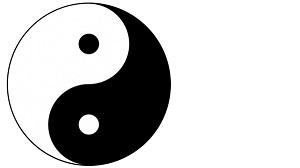
## 1-1 太極──宇宙は「一」から始まった

ここで言う「一」とは、単なる数ではありません。それは陰と陽が分かれる前の、すべてが統一された宇宙の源──動きも、音も、境界もない“全体性”のことを指しています。

人は、目に見えるものに安心し、形あるものに真実を求めがちです。しかしこの宇宙の始まりには、形などありませんでした。何もなく、何も動かず、言葉すら生まれていなかったのです。それが、風水でいう「無極」の状態です。

無極とは、混沌でも虚無でもありません。ただ、まだ分かれていない状態──陰も陽もなく、氣も静まり、動きもない完全な均衡のことです。この均衡から、ある“動き”が生じたとされます。それが「太極」です。



太極は、一と書いて“一なるもの”を意味します。宇宙がまだ分かれていなかった頃に生まれた最初の“運動”とも言われています。それが、風水における「氣」の始まりとされています。

伝統的風水の考えでは、氣の元となる粒子が爆発することで宇宙が生まれ、その氣が物質へと凝縮され、やがて星が生まれ、生物が誕生したと伝えられています。

これが、太極が宇宙を生む原理として語られる背景です。

つまり風水では、宇宙は「無から氣が動き、太極が生じた」という視座で語られているのです。

・白と黒の渦は、対立ではなく循環である

太極図として知られる、白黒が渦を巻く図形。

一般には「陰陽の対立構造」として誤解されがちですが、本質は異なります。

この図形は、陰と陽が互いに極まると反転し、また交わるという宇宙の原理を示しています。

白の中に黒があり、黒の中に白がある──

それは、「陽の中にも陰があり、陰の中にも陽がある」ことを意味しています。

たとえば、太陽は陽の象徴、ろうそくの火は陰です。

しかし、暗闇においては、ろうそくの火は陽となります。

陽と陰は固定された属性ではなく、“氣の状態”として相対的に変化するものなのです。

この太極図は、宇宙における二元性が対立ではなく循環によって成り立っていることを教えています。

・科学が語る“宇宙の始まり”とは

太極とは、宇宙における“氣の最初の動き”である。

この考え方は、現代物理学の一部とも響き合う面があります。

たとえば、科学の世界では「ゼロ点エネルギー」や「ヒッグス場」といった概念があり、空間に満ちた場が揺らぐことでエネルギーが生まれ、粒子が形成されるとされています。

これらは、氣の概念と似た構造を持っているように見えます。

ただし、風水の氣と物理学の場を同一視することには慎重さも求められます。

いまの科学はまだ風水の氣を“理論として明示的に証明しているわけではありません”。

それでも、「氣とは、宇宙に満ちる何らかのエネルギー場のようなものではないか」と考える研究者も少なからずいます。

では、この「氣の動き」とは、現代科学で言えば何に近いのでしょうか？

ここでは、現代物理学で唱えられている5つの代表的な宇宙起源説を紹介し、太極との比較を試みます。

（ビッグバン理論）

【発表者】ジョルジュ・ルメートル（1927年）

【概要】宇宙は約138億年前、極小の一点から爆発的に膨張して始まったとする理論。空間・時間・物質がこの爆発で生じたとされます。

【太極との比較】一点からすべてが始まる構図は太極と似ますが、爆発という無秩序な拡張であり、氣の内的渦とは異なります。

【一致度】★★★☆☆

（インフレーション理論）

【発表者】アラン・グース（1980年）

【概要】ビッグバンの直前、宇宙は指数関数的に急膨張したとする理論。場のゆらぎによって膨張が引き起こされたとされます。

【太極との比較】動き出す直前の“ゆらぎ”という発想が太極の起動と近いですが、なぜその動きが生じたかは不明瞭です。

【一致度】★★★★☆

（無からの宇宙創発理論）

【発表者】ローレンス・クラウスほか（2000年代）

【概要】完全な“無”から量子的な揺らぎで宇宙が自然発生したという理論。空間・時間も後から生じるとされます。

【太極との比較】「無」から「動き」が生まれる構造は、無極→太極と極めて近いですが、“偶然”であって氣や意志は想定されていません。

【一致度】★★★★★

（ホログラフィック宇宙論）

【発表者】ジェラルド・トフーフト、レオナルド・サスキンド（1990年代）

【概要】宇宙は2次元情報の投影であり、私たちが認識している三次元は幻影であるとする理論。

【太極との比較】宇宙を“情報”とみなす視点は氣の情報性と接点を持ちますが、流動性より構造記録の側面が強いです。

【一致度】★★☆☆☆

（意識中心宇宙論・観測者効果）

【発表者】ウィグナー、ホイーラー（20世紀中盤）

【概要】観測が物理現象を決定するという量子力学の原理。意識が現実に関与する可能性が指摘されます。

【太極との比較】意識が世界を定義するという視点は、氣＝意識とする見解と近いですが、太極は“意識”ではなく“構造”として語られます。

【一致度】★★★☆☆

筆者の一考──氣とは意識のはたらきかもしれない

風水が語る「氣」とは、単なるエネルギーではなく、生命を動かす情報であり、方向を持った流れであり、ある種の“意志”を宿すものです。

もし、この“氣”が宇宙の根源にあるとすれば──それは、ただの振動でも、偶然のゆらぎでもなく、「意識」そのものであった可能性があるのではないでしょうか。

私たちは、自分の心の持ちようひとつで、世界を広くも狭くも感じます。

絶望の中では部屋さえ牢獄となり、希望に満ちた心では、狭い空間も宇宙のように感じられるのです。

この“心の宇宙的性質”は、氣が意識であり、意識が氣であるという思想と、どこか響き合います。

これは風水の理論ではありませんが、太極を理解するためのもう一つの視座として、後ほど詳述しますので、紹介しておきたいと思います。